

# 染香

福泉寺寺報  
令和3年2月  
第92号  
(毎月1日発行)

我が人生  
仕上げは 君の  
介護かな

## 鬼の歡喜

「もつと相手のことを考えなさい！」

「こういう時なんて言うの？」

「ごめんなさいは？」

三人の子供たちは、時に一人遊びにふけり、時に仲良くじゃれあい、そしてケンカもしようちゆうです。

叱らない日、笑わない日はありません。

特に年齢の先頭に立つ小学三年の娘に対しては、物分かりがいいだけに、余計に、あたりが強くなつてしまいます。自分の都合最優先の鬼三匹、いや、両親入れて五匹！？デリケートな時期だとわかっていながら、親の方が距離の置き方に失敗するのです。

彼女もまた、彼女自身の情緒と格闘しているように見えます。

そんな娘を、学校の皆さんが救ってくれた、と感じる出来事がありました。



先月、娘は扁桃腺の高熱で一週間弱学校を休みました。布団の中で本を読みながら少しずつ体力を戻し、「今日は、朝病院に行つて、大丈夫なら行く」ということで、途中登校しました。

学校裏に到着する車を体育館に移動中のクラ

スメイト達が見つけて、「おかえりー！」、先生の

合図で「復活おめでとうー！」と声をかけられたと

き、娘は大粒の涙をこぼしたそうです。

うまくいかない悔し涙や、誰かを傷つけたことへの反省の涙などは、娘なりに沢山流してきました。

けれど、嬉しくて涙が出るような経験を、この歳でさせてもらつて、本当に幸せなことと思

ました。

やはり、私たちの心は自分の居場所や、自分を受け入れてくれると感じる人に、よって、素直

になれるようです。この心を仏教では「歡喜

(かんぎ)」と言い、素直になれた心を「柔軟心

(にゆうなんしん)」と言います。

ほしいです、柔軟心……

(住職)

## お経の折々



《大》

お経をあげてみると「大」の字をよく見かけます。

これは、「この上ない」「最も優れた」という意味があります。

インドでは「マハー」と言つて、「摩訶不思議」の摩訶のことです。

例えば、「大慈悲」は仏様、

ご先祖様の慈悲、「小慈悲」は、私たち人間の慈悲の心をそれぞれ表します。

ところで、「この上ない」とは、どんなものでしょうね。ご参考に、

「親思う心に勝る 親心」(吉田松陰)

私の「これだよ」の思いをも超えていくものを

「大」と表しているのですね。

「大」と表しているのですね。

「大」と表しているのですね。

## ちょっと あたまの こりほぐし

- 4個ある→目
- 3個ある→口
- 9個ある→?

?には 何が入るでしょうか?

(今月はわかったぞ、(´・v・`)エッペ!!)



## おてらから

のりよほ(マンション型お墓)

完成いたしました。

すでに半数がお約束済みです。本来は説明会を開いてご案内したいのですが、すみません。

パンフレットを急いで制作中です。ご縁のある方はからのご連絡をお待ちしています。

ホームページが出来ます。

完成間近です。おまちください。

寺子屋はしばらくおやすみです。

お経会も引き続き休みです。

お晨朝(朝のおどめ)

毎朝六時半〜七時

読経の時間は十五分程度です。

なんとなく朝の習慣になつたら、気分が違います。いつでもお参りください。

なんとなく朝の習慣になつたら、気分が違います。いつでもお参りください。

なんとなく朝の習慣になつたら、気分が違います。いつでもお参りください。

なんとなく朝の習慣になつたら、気分が違います。いつでもお参りください。

なんとなく朝の習慣になつたら、気分が違います。いつでもお参りください。

なんとなく朝の習慣になつたら、気分が違います。いつでもお参りください。

しなやかなしぶとさで生きる

ミュージカル劇団『ふるさとときゃらばん』がわが町にもやってきた。農村の嫁問題やサラリーマンのリストラ、村おこしなど、田舎の身近な問題をミュージカルに仕立てて、全国の地方都市を巡演している劇団だ。

今回の作品は『パパの明日はわからない』。不況にあえぐ食品会社の課長とその家族の物語だ。

冒頭のシーンは、主人公の栗木課長が、30年共に働いてきた中村さん（通称「中ちゃん」）をリストラする場面だ。その夜、駅の前で泥酔する中ちゃんに駅長が優しく声を掛ける。「こゝ機嫌だね。何かいいことあったの？」

「ありましたよ。今日、リストラされちゃった」

「そりゃつらいね」

「つらいよ。せがれはまだ大学生なんだ。学費どうしよう。ローンどうしよう。生活どうしよう。女房になんて言おう」

息子が迎えに来る。みんな帰宅を促すが、中ちゃんは帰らない。

「俺、一生懸命働いてきたんだよ。チビで大学も四流。その分、なりふり構わずペコペコ頭を下げまくって30年だよ。もう俺の営業のやり方、時代遅れだって。今はコンピュータが相手よ。いくらペコペコしてもコンピュータは動かねえ。そしたらまた時代遅れだってバカにしゃがって……。お前もそうだよなあ。俺がスーパーで新商品のキャンペーンやっていたのを見て、ペコペコしているオヤジが恥ずかしいって……。男らしくないって……。ペコペコ仕事するのが男らしくねえか。クソ！」

駅長は言う、「中ちゃん、男らしいよ。家族のためにそこまでペコペコできるなんて、誰にもできるこゝちやない。男だよ」。続いて若い駅員もいう。「俺もそう思います」。それを聞いてワーツと泣き出す中ちゃん。



一方、栗木の家には勉強もせず、酔っ払って帰ってくる浪人生の息子と、朝帰りする高校生の不良娘がいる。妻の敏子はこの2人の世話にかなり疲れ果てていた。栗木は部長に昇進し、毎晩帰宅が遅いので相談相手にならない。

敏子は鏡に向かって言う、「子どものため、夫のために人生を無駄にするのはもうまっぴら。自分のために生きよう」



その後、敏子はインテリアコーディネーターの資格を取り、仕事で軌道に乗る。そんな中、今度は夫の栗木がリストラされ、職を失う。職探しをするがなかなか見つからない。敏子は言う、「当面は私の代わりに家事を、お願いね。決められた予算内で家計をやりくりしてね」

栗木は家事をする傍ら、子どもたちが「恥ずかしいからやめて」と言っていた近所のスーパーにパートに出る。スーパーには栗木がリストラされる前に手がけた新商品が並んでいる。今やその商品が大ヒットしている。

ある日、敏子が子どもたちを連れてスーパーにやってきた。懸命に働く父親の姿を見る。

家族が来ていることに驚きながらも、栗木は妻に言う、「奥様、今日は三陸の新鮮なお魚と水菜がお買い得ですよ。ご家族で鍋など如何ですか？」

娘が言う、「パパ、かっこいいよ」

脚本家の石塚克彦さん、「リストラする人も、される人も、再就職する人も、その家族も、みんな生きている。そうやって生きていくことは今までの生き方を変えるわけだ。何があっても生きていく人々を傍から見ていると、悪いけど、そのしなやかなしぶとさに笑ってしまう。そのしなやかなしぶとさを生み出すのは、危うくも、かるうじてつながっている愛の絆のように思える」

長引く不況の中でも、しなやかなしぶとさで生きていこう。



本巻より『日本一心を揺るがす映画の社説』平成22年